

氏 名	広瀬 拓海		
学 位 の 種 類	博士（ 心理学 ）		
学 位 記 番 号	博甲第 9509 号		
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	貧困の子ども達を取り巻く環境の記述と介入 ——子ども達の語る「暇」と活動の変化・拡がり——		
主 査	筑波大学教授	博士（教育学）	茂呂 雄二
副 査	筑波大学教授	教育学博士	原田 悦子
副 査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮 容子
副 査	滋賀県立大学教授	博士（教育学）	松嶋 秀明

## 論文の内容の要旨

本博士学位論文において、広瀬拓海氏は、近年日本の喫緊の課題である子どもの貧困問題に注目し、貧困によって日本の子ども達の環境にどのような変化が生じているのかを理解し、その変化に対する新しい支援の方法論を提案することを目的とした。とくに近年の子どもの貧困問題の背景を、1990 年代以降の新自由主義化の動きと、そこに生じた新たな貧困層と捉え、東京都足立区において研究を進めた。放課後や休日の子どもの達に居場所や、食事、遊びなどを無償で提供する「コミュニティづくり活動」に着目して、社会物質性研究の立場からの参与観察調査を実施した。貧困の子ども達が語る「暇」の言説に着目し、貧困の子ども達等を取り巻く社会文化的環境を微細に記述することで、「暇」言説を生み出す社会的心理的物理的アレンジメントを明らかにするとともに、子ども達への心理的支援策を考案し実践し、その意味を検証した論文である。要旨は以下の通りである。

著者は研究 1 と研究 2 について、アレンジメント記述を行う準備研究に位置付け、研究 1 では、コミュニティづくり活動への参与観察を実施し、貧困の子ども達のアレンジメントから顕現する 3 つの特徴（「暇と語ること」、「部活動からの離脱」、「無料の資源による活動の創造」）を抽出している。研究 2 では公立中学校で質問紙調査を実施して、上記 3 つの特徴が見られる子ども達の位置づけを確認している。

研究 3 では、研究 1 の特徴が顕著に見られる子ども達にインタビューを行い、彼らを取り巻くアレンジメントを詳細に記述した。研究 4 ではコミュニティビルダーへのインタビュー調査から得られたデータをもとに、貧困の子ども達を取り巻く「学校」、「家庭」、「コミュニティづくり活動」のアレンジメントについてのさらに深い記述を行った。新自由主義を「権力のテクノロジー」としてとらえる議論を整理して、研究 3 および研究 4 で記述したアレンジメントの背景にある新自由主義の影響について明らかにしている。

以上から、現代の日本で、子ども達の貧困が、新自由主義の影響を受けた教師や保護者との関係の中で「暇」であるを感じつつも、その時間を過ごすために身近な空間の中を利用可能な資源を求めてさまよい、その過程で時間を過ごすための活動を見つけ出すことや、あるいは新しい活動をつくり出すようになる状況を意味するという示唆を見いだした。この状況は、一見リスクであったが、その一方で

子ども達が自分たちの参加する活動を「変化」させ、さらに大人との出会いの中から新しい支援を生み出す、活動の「拡がり」をも創り出すものであった。この考察を受けて、著者は、貧困の子ども達の「活動の変化・拡がり」としての学習を支援する方法開拓を目的として介入研究を行うことに定めた。

研究5では、新しい「支援の方法論」について検討する前に、既に存在している学校外での貧困の子ども支援が、貧困の子ども達の「活動の変化・拡がり」としての学習にどのような貢献をし得るのか、またどのような課題を抱えているのかを確認した。足立区において子ども達の支援に取り組む非営利団体を対象とした質問紙調査を実施し、足立区においては研究3および研究4で記述した以外にも、「貧困の子ども支援団体」が一定数あること、またそこでは特に子ども食堂や、居場所づくりのような気軽に参加しやすい取り組みが行われている一方で、「専門性を持つ大人」が主催する取り組みが少ないという特徴を発見した。

以上から以降の介入研究の目標を、貧困の子ども達のアレンジメントに「専門性を持つ大人」をつなぐことで新しい支援の方法論を開拓することにさだめている。特に、「専門性を持つ大人」をつなぐための介入の仕組み（プラットフォーム）についての検討をし、そのプロトタイプとして「タレントショーづくり」を考案している。

研究6および研究7では、「タレントショーづくり」を通じた介入によって、参加者の子ども達のアレンジメントに生じた変化をデータにもとづいて分析している。特に、研究6では主に「企画ミーティング」について記録したデータからつながった「人・モノ・制度」を、研究7では子ども達へのインタビューデータをもとに、形成されたアレンジメントの効果を、それぞれ詳細に記述している。以上の2つの研究から、「専門性を持つ大人」が学習の資源となること、活動のあり方がアレンジメント形成を大きく左右すること、子ども達が普段出会わない人々につなげることで既存のアレンジメントの問題（学校の息苦しさ）を解消する可能性があることの3点を示している。

研究8ではさらに「タレントショーづくり」に対する発達研究等の専門家である第三者視点からの評価を分析して、本研究の介入の効果が、アレンジメントの4特徴（「介入対象活動」、「介入を行った地域」、「子ども達」、「タレントショーのあり方」）に制約されていることを明らかにしている。以上の8研究を踏まえて、最後に本論の知見を整理した上で、本論の意義、課題、今後の展望がまとめられている。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

本論文は、現代の日本のみならずグローバルで緊急の課題となっている子ども達の貧困問題に、心理学の観点から取り組んだ意欲的な研究論文である。約5年にわたるフィールド研究に基づいている上、子どもの貧困を描く観点についても、フーコーの新自由主義論を充分咀嚼した上で参照し、分析と記述の観点についても最新の社会文化研究である社会物質性研究を綿密な文献研究に基づいて参照する等、きわめて新奇性の高い研究論文であると評価できる。また、ただ単に、子どもの貧困の現実を記述し理解するのに留まらず、子ども達自身にも参加させて作り上げる、タレントショーという実践介入研究を行っていることも、ただの空理空論に終わらない大きなインパクトを持った研究であると評価できる。

事例研究であるため、特定地域のデータであること、大半は定性的な記述であること、実践介入研究についても研究資源の制約から少数の参加者数に限定されている等の限界はあり、今後の一般化や、介入研究の大域化と効果測定の必要等の課題が残ることも事実である。

しかし、通常、貧困という環境や生い立ちの犠牲者として描かれる子ども達であるが、その子ども達がじつは「強さ」を持っていることをあぶり出し、その強さから活動の変化や広がりの可能性を描いたことは、貧困研究の在り方に一石を投じるインパクトを持っている。また、それに留まらず、様々な問題を抱えた人々へのケアを考える心理学一般に対しても、一定の意味や含意を有する研究であると評価できる。

令和2年2月2日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。